澪標

Miotsukushi

1998年12月1日発行

No. 70

MIOTSUKUSHI

大阪府青年国際交流機構
会長　松本　仁孝

今号の紙面

航空機による青年海外派遣事業レポート

アジア太平洋青年招聘事業
レポート

「One World Festival」報告

インフォメーション

1998 航空機派遣リポート

Report ドミニカ青年を取り巻く環境

ドミニカ派遣団員 高井理香

滞在中、本当にいろいろな人々との出会いがありました。とりわけ強い印象を残したのは、ほぼ同世代の若者との出会いであった。

カリブ海に囲まれた国の人々に対する形容としてよく用いられる言葉に「陽気」や「社交的」などが挙げられるが、私が出会った彼らも例外ではなかった。第一点目として挙げられるはこの点である。

国中どの場所を訪れても、みな非常に明るく、そして屈託がない。視線が合うと、直ぐに微笑みかけてくれ、挨拶してくれる。時には車ですれ違いざまに手を振って来たり、ウインクしてくる人もいた。国中の人がまるで昔から友人だったのではないかと錯覚するほど、社交的だというのが強烈な印象として残っている。わずか3週間弱の滞在であったのに、帰国後しばらく、気づくと私も同じように振舞っていた。

第二点目としては自国を愛しているということだ。初対面であるにも関わらず、澄んだ瞳をまっすぐ私に向け、ざっくばらんに話しかけてくれた。ある時は、スペイン占領時代に建てられた建築物を眺めながら、各々の歴史について話をしたり、またある時は、食事をしながら互いの国々が抱える問題点とその解決策について議論したりもした。さまざまな話題について語り合ったが、共通して言えることは、彼らのほとんど全てが自分自身の意思、問題に対する意見を非常にしっかり持っている点だ。国が抱えている問題は日本のそれよりもはるかに深刻である場合が多い。経済面では失業率が非常に高く、地域によっては定職に就いてるよりも無職の人の数のほうが多かったりすることも少なくない。また義務教育さえ受けられない子供に首都のサントドミンゴ市で出会った。このような問題を抱えながら、彼らは現実をしっかりと受け止めていた。そして決して悲観的なものの見方をしていなかった。この点に快い驚きを覚えた。どんな状況下でも自分がドミニカ人であることを誇りに思っており、この国を愛しているということを表明していた。

私は今回の訪問で、人間として、また日本人として生きていく上で必要不可欠なエッセンスを学び直すことができた。上手く表現できないが、人のもてなし方の基本と己の存在意義についての種を彼らからもらい、それを持ちかえり、これから芽を出すように育て続けようと思う。

Report デンマークの家族形態

デンマーク派遣団員 桑野哲治

デンマークの家族形態は大変独特なものである。三世代に渡る同居というものはまずない。成人した子供との同居もほとんどない。そして最も独特なのはカップルの形態である。異性の結婚しているもの、法的登録をしているもの、同棲しているもの、そして同性の法的登録, 同棲しているもの、計五種類の形態がある。これらの間には税金等の社会的扱いに差はほとんどない。よって人々はあまり結婚という形式ににこだわっていない。

例えば友達同士のパーティーでカップルで来ていても、どのカップルが結婚しているとか同棲しているだけとか誰も知らない。というより誰もそんな細かいことは気にしていないのだ。

離婚も珍しくはないのでシングルペアレンツの家庭も少なくない。再婚も多く、二度、三度目の結婚も珍しくない。何にしても人々はそんなことは気に留めていないようである。

例えば友達のホストファミリーの両親は両方とも再婚で、しかも離婚した後もその相手、そしてその家族までも交えた交流が続くのである。実際共にパーティーを開いたり、旅行に行ったりもしている。このようなことも決して例外ではないらしい。

しかしながら子どもの教育に関しては問題が出てきているようだ。デンマークでは子どもができると夫婦で合わせて一年間の育児休暇を取ることが出来る。(実際夫婦で半年間ずつ取る家庭が多い)しかしながら男性の就業率が95%以上、女性では85%以上のこの国ではそれ以降子どもの教育に携わることが出来る家庭は多くない。いくら様々な育児、教育施設が充実しているからと言っても、そして両親とも六時、遅くとも七時くらいに帰ってくるとしても、子どもにはもっと親と多くの時間接する必要があるのではないかいう声も上がっている。

そして子どもには幼い頃から自立心が教育され、学校に行きながらでも早い時機から一人暮らしをするものもおり, 十八歳になればほとんどが親元を離れることになる。(国からの補助があり、金銭的にほとんど問題がない)しかしながら、この自立心の教育もある子どもにとっては意識的にしろ無意識的にしろどこかで負担になっているのではないだろうか。デンマークは大変成熟した社会であるとの印象を受けたが, 町角の落書きを見るたびに, どこかに歪みがでてきていると感じられた訪問であった。

いってきました!!

Report 二度目の韓国訪問

日韓青年国際交流事業　落合　豊

初めて韓国を訪れたのは昨年夏。それまで韓国について、漠然としたハングル、キムチ、数年前戦争の相手国となった国といったイメージしか持っていませんでした。どのイメージも先入観によってつくられたあまりにも浅はかなものでしかありませんでした。

昨年訪れた時は日数も短く、何が何なのかよく分からないまま日が過ぎてしまいました。しかし、今回は15日間という長い日数でいろいろな経験ができました。東大門、南大門、明洞、仁寺洞、大学路と生の韓国人を見ることができ、また板門店では、軍事境界線上に立つという貴重な経験もしました。

そしてホームステイでは、ニュージーランド人のジョナサン　ホップクラフトとの出会いがありました。彼は韓国へ来て1年と数ヶ月で韓国語も最低限のもの、当然日本語は全くわからないという状態でした。何で韓国へ来て一人暮らしのニュージーランド人の家でホームステイをと思いました。しかしジョナサンは英語があまりわからない私のために簡単な単語を選んで話をしてくれ、それでもわからない単語がある時は身振り手振りを混ぜわかるまで説明してくれました。このような状況で2人きりだから会話がはずむということはありませんでしたが、自分の意志を相手に伝えようという気持ちは互いに伝わったのではないかと思いました。

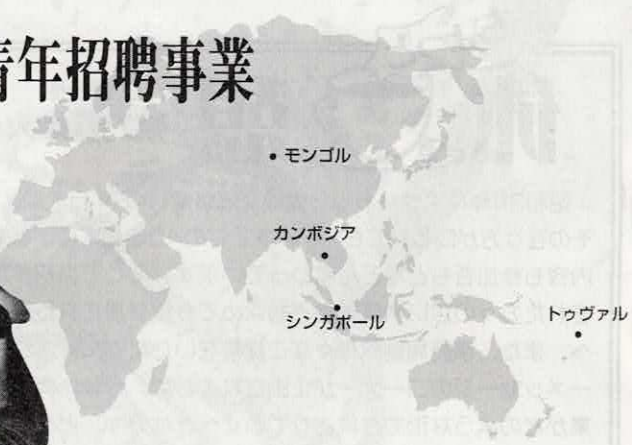
また高麗大の学生、日本へ招聘される学生との交流も生の声を聞くことのできる貴重な体験であったと思います。同じ大学生でありながら、韓国では早朝から図書室の席を取るために並ばなければならない。また卒業のために単位とは別にボランティア活動が必要であったり、何らかの資格を取らないと卒業を認められない大学もあるという話を聞きました。そして一般的に男子大学生は1年生が終わると大学を休学し兵役へ、中には大学へ通いながら軍隊へ行く学生もいると聞きました。

見た目には大差のない日本人と韓国人。しかし内面を見ると大きな違いを感じました。韓国人には日本人が忘れかけている熱いパワーを感じることができました。日本が韓国に学ばなければならないこと、またその逆もたくさんあると思いました。

この15日間での多くの出会いが、この先この2国にとって有意義なものであることを期待しています。そして2国間だけにとどまらず世界へと目を向けることができればこの事業へ参加したことがとても有意義なことであると言えると思います。

平成10年度総務庁アジア太平洋青年招聘事業 受け入れプログラムを終えて

実行委員長　酒井洋右



10月23日から28日まで上記事業の地方プログラムが大阪で行われました。**カンボジア、シンガポール、トゥヴァル、モンゴル**の4ケ国から19名の青年が参加されました。プログラム中雨の降る日もあり、充分満足の行った受け入れではなかったように思いましたが、我々を始めとする**I.C.O.各団体の皆様の暖かい思いは十分に伝わった**のではないでしょうか。

23日初日は、大阪府庁表敬訪問、WELCOMEパーティー兼ホームステイマッチングが行われました。その夜より25日までホームステイが各家庭で行われ、25日の夜は梅田で青年との夕食会が催されました。26日は午前中、天保山海遊館見学、午後から南港ATCにて帆船あこがれの見学、エイジレスセンター見学と足を使ったプログラムで少々**疲れが見えた一日でした。**エイジレスセンターにて**足のマッサージ機が人気が高かった**のは言うまでもありません。27日は生憎の小雨で午前中は松下技術館見学、昼食後、午後は大阪ミナミ散策（free　time）でした。この日はマンツーマンで青年に対応出来るように考えていましたので、各参加青年の方には、思い思いの所に行っていただけたものと思っております。

最終日、28日に見送り先の新大阪駅で**トゥヴァル参加青年より大変美しい四部重奏の歌を聞かせていただいたのが、非常に印象的でした。**最後に、プログラム後の東京でのフォーラムに参加された方から伺ったのですが、**「大阪のプログラムが最高だった。大阪に帰りたい！」**と彼等が言っていたそうな…嬉しいですね。

大阪を印象に焼き付けて戴いて良かったと思っております。そしてご協力戴きました**皆様大変有難うございました。**

One World Festival 報告

11月3日（火）鶴見緑地公園

木下昌恵

台風のおかげで、このお祭りも延期され、野菜も値上がりした。その高い野菜が、私たちの目の前に並んでいる。明日は待望のタコス屋になる日。今日は下準備だ。久しぶりに触れるレタスにトマト。けどそんなのんきな事は言ってられない。これを今から全部千切り、角切りにして、明日はトルティーヤにのせるだけにしなくては。5人の手はせわしなく動く(口も)。最後は、大きな鍋にお湯をわかして、乾燥したお花を惜しみなく入れる。メキシコ直送のハマイカジュースの出来上がり。赤いジュース「どんな味？」「向こうではアグアのように飲んでるよ。」一口飲むとまさにその通り。それはジュースというより、味付色水？明日の皆の反応が楽しみだ。

一夜あけ、とてもいい天気。今年は鉄板を前に、おなじみ岡本さん家のサボテンも輝いている。ぼちぼちだった客足も、可愛い(焼野さんのお子様方)正直なことしか言わない実直な呼び込みに誘われ、アミーゴたちのダンスも盛況(観るだけ観て終わると買わずに帰る人も多かったが)徐々に頻繁になり、大忙しの一時を越え、完売御礼のポスターを出す。ハマイカジュースは好評だった。全部で250食。それはこのお祭りに250人を上回る人が集まったという事。それぞれが、珍しい味、懐かしい味を味わった。集まったテントも様々。ボランティア団体、留学生の集まり、府内の観光宣伝、各国の音楽、舞踊、民族衣装、絵画の展示。誰が来てもいい、たくさんの扉が集まり開いているそんなお祭りだった。

ワンワールドフェスティバルにも参加していたPHD協会がアジア・太平洋の村づくりを支援するために、書き損じはがきや古いはがき(未投函)、未使用の切手、テレホンカード(未使用・使用済を分けて)などを集めています。
宛先は、(財)PHD協会
〒650-0022　神戸市中央区元町通5-4-3、202
TEL078-351-4892

ちょっと休憩

IYEO副会長
焼乃嘉津人

昭和34年にスタートした国際交流事業も40年目を迎え、その在り方が問われてきています。この40年の間に、事業内容も参加者もどんどん変わっています。そこで当初参加された方々の思いや反省なども含めて今後参加される方々へ、また、事務局側へ様々なご提言をいただきたく、リレーメッセージのコーナーが企画されました。今後、交流事業がどのような形で存続されていくべきなのか、どういう心構えで参加すればよいのか、また、事業に参加したことで自分の人生にどういう影響があったかなどというようなこともぜひお寄せください。近況報告も交えて、気軽にリレーにご参加いただければ幸いです。

御寄稿くださる方は
國分由佳（06-877-7233）迄

INFORMATION BOARD

●『いってらっしゃーい』世界船壮行会

1月8日（金）PM6：30より府立青少年会館情報センターにて、世界青年の船壮行会を開催します。

今年度参加者はもちろん、既参加者の皆さん（ん十年前の方も大歓迎！）も楽しいつどいにご参加ください。

●世界船リユニオン日程が変更に!!

マクロコズムでお知らせした世界船リユニオンが、3月18日から3月17日（日）に変更になりました。日曜日になったので、参加しやすくなったと思います。詳細は次号で。

●外国の方紹介して!

毎年大好評のクッキングコミュニケーションが、3月に開催されます。料理ができる外国人をご存じの方はぜひご紹介ください。また、一度も参加したことのない方、とってもおいしくて楽しいですよ！ぜひ、ご参加ください！詳細は次号で。

青春後記

先日行なわれたワンワールドフェスティバルを覗きに行った(手伝えなくてごめんなさい！)。3時ごろに行ったので食べ物は8割方売り切れていたが、他のNGO・NPO団体の紹介やフリーマーケットなどを見て回った。団体名を忘れてしまったが(知ってる人教えて！)、ネパールの子供達が編んだセーターを売っているブースがあった。子供達が実際セーターを編んでいる写真とセーターのタグの所に手書きで編んだ子の名前が書いてあるのが愛らしく、思わず買ってしまった。すると、買ってくれた人の写真を本人に見せたいからと、スタッフの方が、セーターを胸に当てた写真をとってくださった。なんかとってもうれしかった。セーターと写真を通じてその子とつながったような気がした。今、家で毎日そのセーターを着ている。私を励ましてくれるとってもあったかいセーターだ。子どもが仕事をしなくてもよくなる日がくればと思う。

(OH! NO!)